



TITLE:

急速に発展する科学技術社会における平和

AUTHOR(S):

前川, 佳徳

CITATION:

前川, 佳徳. 急速に発展する科学技術社会における平和. ティリッヒ研究
2005, 9: 13-22

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57638>

RIGHT:

ティリッヒ研究 現代キリスト教思想研究会

第9号 2005年3月 13～22頁

急速に発展する 科学技術社会における平和

前 川 佳 徳

要旨

科学・技術は人類の幸福に貢献したが、人類を絶滅させることができる兵器や、人類の存続を脅かす最近の環境破壊などの不幸をももたらした。科学・技術の発展は「平和」に対して両義性を有する。このようなジレンマに対し、ティリッヒは、「近代の発展は、それを避けることも逆行することも不可能な歴史的事実として承認し、あらゆる歴史的運命が、その意味と価値とに両義的であることを受け入れねばならない」と述べ、その根拠として、「われわれの現代世界の悲劇的な自己破壊は、単に現代の世界がもたらした特殊な矛盾の結果であるばかりか、常に人間の生を特徴づける矛盾の結果でもある」と述べる。科学・技術や技術社会が引き起こす問題を的確に指摘しながらも、それらを全面的に否定せず、信仰者として為すべきことを探るのがティリッヒの姿勢で、「信仰的現実主義」と呼ばれる。急速に発展する科学技術社会における平和の観点から、ティリッヒのこの思想を論じる。

Summary

Science and technology have contributed to promote happiness for mankind, but they also have brought unhappiness, for instance, weapons which can wipe out mankind or recent environmental destruction which threatens subsistence of mankind. Thus, development of science and technology has ambiguities to "peace". To such dilemma, Tillich said that we must accept the modern development as a historic fact which cannot be evaded or reversed, and which, like every historic destiny, is ambiguous in its meaning and value. And he explained its ground as that the tragic self-destruction of our present world is the result not simply of the particular contradictions bred by that world but also of the contradictions which characterize human life always. Tillich exactly designated the problems caused by technical society, but he did not deny the technical society, and he sought practicable actions as Christian for them. Tillich called the thought "faithful realism". Tillich's faithful realism on peace in advanced technical society is treated in the report.

は じ め に

20 世紀は科学技術が目覚ましく進展した時代であり、科学技術の進展によって人間の生活や社会、文明などが大きく変化した時代であった。

20 世紀前半の二つの不幸な世界大戦は、「世界」という概念を現実的なものとして認識させた最初のものと言えるが、そのような状況をつくりだしたのも、飛行機等の高速移動手段の発展⁽¹⁾、無線電信等の遠隔地間リアルタイム通信手段の発展⁽²⁾など、20 世紀の初頭において急速に実現した科学技術の成果であった。また、それら科学技術の軍事的応用により、戦争の形態も様変わりした。第二次世界大戦の終わりには核兵器という、これまでになかった全人類を瞬時に破壊できるものまでが開発され⁽³⁾、現在においてもその取扱いが大きな課題となっている。

一方、20 世紀後半には世界大戦と呼ばれるようなものはなく、表面的には科学技術の成果がわれわれの日常生活の豊かさを増進していったように見える。それによって、第二次世界大戦の後、科学技術が引き起こす問題（とくに核開発の問題）について多くの論議がなされたにもかかわらず、その後の日常生活における科学技術の貢献がそれらの論議を冷まさせたとも言える。しかし、20 世紀の終わりに至り、豊かさの負の遺産としての地球環境破壊の問題、電腦社会による人間疎外の問題などが顕在化してきた。さらには、遺伝子操作等のわれわれにはその内容をよく理解できない先端科学技術が、将来の不安要素として問題視されてもいる。

21 世紀に入って、上記のような状況の中で、科学技術が引き起こす問題に対して再度多くの関心と論議が求められているにもかかわらず、科学技術は相変わらず急速に発展しており、かつ無自覚、無批判的に受け入れられて、われわれの平和と平安が脅かされていると言える。

このような現状に対し、ここではキリスト教神学の立場から、われわれは何を為し得るか、何を為すべきか、そのことを論議してみたい。結論を先取りして言うならば、神学こそがこのような状況に答えをいかなければならないと考えている。論議にあたり、プロテスタント神学者であり宗教哲学者であるパウル・ティリッヒの『平和の神学』（Tillich[1990]）にある『世界状況』（Tillich[1945]）の議論を中心に、＜信仰的現実主義＞と呼ばれるティリッヒの思想を取り上げ考察する。

1 科学技術社会の歴史的分析

1945 年の『世界状況』と題する著作の中でティリッヒは、「現在の世界状況は「ブルジョア社会」と名づけ得る社会の勃興と勝利と、その危機の結果、生じたものである」（Tillich[1945],

p.160)と述べる。この展開は、第一段階(18世紀)のブルジョア革命の時代、第二段階(19世紀)のブルジョア階級勝利の時代を経て、現在は第三段階(20世紀)のブルジョア社会危機の時代にあり、人類は急速に進展した科学技術社会によって解放されたが、一方でそのことによって生じた自己破壊の諸力に対し、コントロールする方策を見出そうと格闘していると捉える。

まず、第一段階から第二段階への移行の決定的特徴は、「革命的理性(revolutionary reason)」から「技術的理性(technical reason)」への変容であると述べる(ibid., p.164)。

革命的理性とは18世紀の理性を指しているが、ブルジョア革命の時代の指導原理は理性に対する信仰であった。この時代において、理性は自然と本質的に調和するとみなされ、「理性はまさに人間の原理そのものであり、人間に尊厳を与えるものであり、宗教的政治的絶対主義の奴隷状態から人間を解放するものであった」(ibid., p.161)。したがって、人間のあらゆる営みを理性の支配下に引き込み、それゆえに革命的理性と呼ばれる。

一方、技術的理性は19世紀ブルジョア階級の勝利の時代に興ってきたもので、ティリッヒは、革命的理性から技術的理性への変容とその問題性について、以下のように分析する。

「ブルジョア革命が成功したその程度に応じて革命の推進力は影を潜め、指導原理としての理性の性格は変化した。新しい支配階級は封建主義と絶対主義の残存部分と妥協することができたし、事実妥協した。彼らは真理と正義の原理としての理性を犠牲にし、その理性を、主として彼らが懸命に完成させようとしていた技術社会に役立つ道具として使用した。かくして「技術的理性」が生産と交易の新しいシステムの手段となった。……革命的理性は、手段については保守的であったが、目的については「ユートピア的」であった。それに対して技術的理性は、目的については保守的であり手段に関しては革命的である。意志が命じるいかなる目的にも自身を供し得る。たとえ真理と正義の意味での理性を否定するような目的にも、自身を供し得るのが、技術的理性である」(ibid., pp.163-164、下線は筆者による)。

そして、この技術的理性によって造り出された道具を使って、人間は大規模な生産と経済競争の世界的規模のメカニズムを創り出した。しかしながら、人間は物理的自然を益々コントロールし操作できるようになったものの、一方でそのことによって人間が創り出した「人工的自然」⁽⁴⁾は益々コントロールできなくなり、人間は自身が産み出した人工的創造物に飲み込まれてしまう結果となる。

ついで第二段階から第三段階の現在⁽⁵⁾への移行、ブルジョア階級勝利の時代からブルジョア社会危機の時代への移行であるが、その特徴はブルジョア社会とその「自動的調和(automatic harmony)」⁽⁶⁾の精巧な仕組みの自滅であり、自動的調和の原理に代わって「計

画する理性 (planning reason)」が世界状況を規定する原理となったと、ティリッヒは指摘する (cf., ibid., pp.168)。

ティリッヒが述べる自動的調和の原理とは、あらゆる生活領域で示され、たとえば「経済的領域においては、個人が各々その経済的利益を何らの制限もなく追求するなら、すべての人々の福祉が最良に満たされるであろうと信じられ、「市場の法則」を自動的に機能させれば、公共の利益は守られるだろうと信じられた」(ibid., p.162) 信条である。これは 18 世紀のブルジョア革命の時代から 19 世紀のブルジョア階級勝利の時代にわたって、精神的政治的指導者達の信条であった。

この自動的調和の神話が、技術的理性によって進展させられた科学技術社会によって崩壊し、ついでその対処として採択されたのが「計画する理性」である。20 世紀における計画的理性の現れのひとつがファシスト体制であり、もうひとつがソビエト体制であるが、これらの試みのいずれもが失敗に終わったと言える。ティリッヒは、両体制とも自動的調和を信じたブルジョア信仰に対する反動であり、両体制とも両義的であると捉える。一方で、予測不可能な世界経済のメカニズムを人間の支配下に回復させようと試みながら、他方ではブルジョア社会の第二段階によって作り出された自己破壊的緒力を強化してしまったのである。

ティリッヒは、この発展段階はもはや逆行できないと述べるが、ブルジョア社会危機の時代での指導原理はいまだ見出しえず、21 世紀の現在も有効な方策が見えないままに世界は格闘し続けているのである。

2 科学技術の本質について

1945 年の時点での世界状況の分析においてティリッヒは、現在のわれわれが感じる不安の根源を「技術的理性」の成り立ちと、その特性を示す中で提起し、技術的理性が作り出した「科学技術社会」の問題の分析を行って、それを乗り越える方策がいまだ見出しえていない状況を提示した。この状況分析をよく理解するためには、科学技術の本質⁽⁷⁾についても押さえておかねばならない。

科学技術を論じる際に確認しておかねばならないのは、科学 (science) と技術 (technique) と科学技術 (technology) の区別である。

技術とは、ある目的を達成するための手段であり、人間が創造された時から有している本能的行為である。その行為の責任は行為者にあり、一般的には多くの人間にとっての幸せをもたらす商品 goods を造りだすためのものと捉えられていた。

科学は 17 世紀のいわゆる「科学革命」以後に形成されてきたもので、その形成動機は、創造主がこの世界をどのように支配しているのか、その原理や法則、創造主の真理を知りたいと

いうものであった。

この科学と技術の融合が科学技術であるが、その融合は 19 世紀以後、急速に展開された。技術が科学と結びつく過程においては、目的を達成するための技術的課題と、その有効手段の科学的原理や手法の結びつけに関心が集中し、目的そのものを吟味する「倫理」の部分が希薄になっていった。と言うよりも、従来の技術のみで取り組んでいた結果と、科学と結びついて取り組んだ結果に大きな差異があり、当初の目的を超える成果によって、目的自体が手段に振り回される逆転現象が生じたのである⁽⁸⁾。さらに、科学と技術の融合の効果が認識されるにつれて、その結び付きはシステム化され、巨大化され、さらに分業化されて、造り出された結果への責任の所在が曖昧になってしまった。

そのような歴史過程の中で、ティリッヒが指摘するように、技術的理性が社会全体を支配し、その結果造りだされてきた人工的自然が自動的調和の仕組みを自滅させ、さらにそれをコントロールする計画する理性も有効に機能していないのが、現在のわれわれを取り巻く状況なのである。

もちろん科学技術の専門分野においても、このような状況に対し、技術倫理の確立を求める作業がなされている。しかし、そこでの議論は主に、どこまでが許される技術であり、どこからが許されない技術かの線引きと、「どのようにして」許されない技術を規制するかの方法論である。これが、技術的理性に支配されている科学技術専門家の問題点である。

よく取り上げられるデカルト（1596-1650）より以前、「自然学」は自然の存在の「なぜ」を問う知であり、それに対して目的論的に答えることであった。しかしデカルト以後、「自然学」は「自然科学」となり、自然のメカニズムが重視され、「なぜあるのか」を問うかわりに「どのように動いているのか」を問う知に変貌することとなる。すなわち、「なぜ」には深入りせずに、「どのようにして」のみに関わることによって、大きな成果を得てきたのである。

したがって、技術倫理においても、「なぜ」そのような状況になったかから問うのではなく、「どのようにして」この状況を克服（規制・管理）するかという問いから始めるのである。このような姿勢をティリッヒは否定し、人間の存在論的問いから始め、「なぜ」の問いから「どのように」の答えを導くことを求める。

3 キリスト教的解答のための指針

1945 年の『世界状況』の分析と問題提起の最後に、ティリッヒはキリスト教的解答のための指針をも示した。5 つの指針を挙げているが、その部分を順に考察してみたい。

「現代世界に対するキリスト教のメッセージが、説得力や革新力をもつ真のメッセージたり

得るのは、ただそれが現在のわれわれの歴史的状況の深みから生み出されている限りにおいてである」(*ibid.*, p.220)

歴史的状況の深みとは、事実(状況)の羅列による問題点の列挙だけでは不十分で、その事実の意味<「なぜ」を問う>ことがまず求められている。また、世界状況の深みを見通し得るのは、一人の思想家や一つの神学運動ではなく、エキュメニカルな取り組みが求められ、これは神学においてのみならず、<科学技術の専門家、政治・経済等の専門家も含めての普遍的な取り組み>が求められる。

「キリスト教的解答は、近代の発展を避けることも逆行することも不可能な歴史的事実として承認しなければならず、またあらゆる歴史的運命がそうであるように、その意味と価値において両義的な歴史的事実として受け入れねばならない」(*ibid.*, p.221)

ティリッヒは自身の分析を、近代文化の否定的特徴、矛盾や錯誤を扱ってきたと述べる。しかし、その解答においては、近代の肯定的貢献を認識し承認しなければならないとする。この点がティリッヒの特徴的な姿勢であり、<信仰的現実主義>と評されるところである。

キリスト教はそのメッセージの本質そのものにしたがって、いずれの特定の歴史的状況をも越えようと試みなければならないし、キリスト教の今日の課題は、<現在の世界状況に適應することと、これを越え出ることを同時に遂行>しなければならないと述べるのである。また、バルトを例に、戦闘的姿勢は「否」と言うことに関しては強いが、「然り」ということに関しては弱く、そこからは人格的生の新しいタイプを生み出すことはできないと述べる(*cf.*, *ibid.*, p.209)

「現代世界の悲劇的な自己破壊は、単に現代の世界がもたらした特殊な矛盾の結果であるばかりか、常に人間の生を特徴づける矛盾の結果でもある」(*ibid.*, p.221)

人間の生とは、「存在の現実体(*actuality of beings*)」としての基底をなす、本質的なものと実存的なもの、その両要素から構成される(*cf.*, Tillich[1963a], p.12)。この両義性が、人間の生を特徴づける矛盾でもある。このような人間存在の根源からの考察を行うとき、キリスト教の真正のメッセージは、決してユートピア的にはなれない。また、このような考察は、技術的理性では行えず、科学技術の専門家の最も不得意とするところであり、<神学こそが応えていかなければならない>分野である。

「キリスト教は宗教的な逃避の意味でその解答を与えない。むしろいかなる歴史的状況にあっても、神の恩寵の働きは決して欠けていないと主張する」(Tillich[1945], p.222)

これもティリッヒの特徴的な姿勢である。逃避的でもなく、ユートピア的(非現実的理想主

義)でもなく、<信仰的現実主義>の姿勢から、その境界(boundary)に立ち続けようとする。キリスト教は戦いから退くことなく、未来と向き合わねばならないと、ティリッヒは主張する。

「キリスト教的解答は理論的であり同時に実践的でなければならない。……キリスト教会は、現在の世界状況に深く束縛されているその度合にもかかわらず、なおそれを通して答えが与えられなければならない歴史的集団なのである」(ibid., p.222)。

神学は状況を分析し、問いを発するのみならず、それへの実践的答えも示さなければならない。そこが哲学と異なるところである。科学が理論的アプローチを取り、技術が実践的アプローチを取るのと同様の関係で、哲学が理論的アプローチに近い思索を行うのに対し、神学には実践的アプローチに近い思索が求められる。また、科学と技術が融合し、科学技術として力を得たのと同様に、哲学と神学が融合し、哲学的神学によるアプローチ(ティリッヒのようなアプローチ)が、キリスト教的解答に対して有効であると言える。

4 核兵器保有に対するティリッヒの見解

ティリッヒの姿勢として、現実を肯定することから始める<信仰的現実主義>が、その特徴として挙げられた。また、困難な問題に対しても、逃避することなく、実践的答えを提示していく姿勢も特徴として挙げられる。そして、『平和の神学』(Tillich[1990])にある「ベルリンの状況における倫理的問題」(Tillich[1961], pp.235-237)の中で、ティリッヒは以下のような見解を示している。

- ・倫理的問題は、力を行使する権力グループが正しいか、間違っているかの問題ではない。
- ・社会的グループの共同体を維持することが、「創造的正義(creative justice)」である。
- ・社会的グループが攻撃されたと感じる時、あるいはそれが存続するための力と、それが抛って立つ究極的原理(たとえば民主的自由のようなもの)を防衛する必要がある場合、戦争に突入する決定は正当化される。
- ・原子爆弾による戦争は倫理的に正当化されない。なぜなら、それは防衛すべき社会的グループをも絶滅させるものであるからである。
- ・それにもかかわらず、原子爆弾を装備することは正当化される。それは敵に、もし先に原子爆弾で攻撃しても、同じ徹底的な破滅が敵にももたらされることを示すからである。原子爆弾を(再び)最初に使うものとなってはならないが、双方が原子爆弾を保有することは、十分な戦争抑止力になることを認める。(下線は筆者による)。

ティリッヒは、穏健な核政策のための国民委員会（SANE）などの団体から、核実験に反対し核非武装を主張する立場を支持するように繰り返し要請されたにもかかわらず、心からの支持を与えることを拒否し、とくにそれらの平和主義的な傾向には抵抗したと言われる。このような結論に至る理由が、現実を肯定することから始める信仰的現実主義と、困難な問題に対しても、逃避することなく、実践の答えを提示していく姿勢によるものと考えられる。核保有に対するティリッヒの見解は、信仰的現実主義の帰結の一例であるが、そのような実例も踏まえて、ティリッヒの見解は考察されなければならない。

む す び

急速に発展する科学技術社会における平和を考えるにあたり、ティリッヒの「世界状況」の分析における「技術的理性」の捉え方を参考にし、またその状況に対する「キリスト教的解答のための指針」から、われわれの為すべきことを探ってみた。

結論としては、

- (1) 神学、科学技術、政治経済等の専門家が、協働することが求められている。
- (2) 現実の否定と肯定の境界に立ち、また逃避的でもない、ユートピア的でもない、信仰的現実主義の姿勢が求められている。
- (3) 人間存在の根源からの考察が必要であり、その部分において理論的かつ実践的に答える神学が求められている。
- (4) その時々具体的に決断する姿勢が求められ、結果の評価を恐れずに信仰を持って決断し続けることが求められている。

註

- (1) 1903 年アメリカのライト兄弟が、ガソリン機関付き飛行機の飛行に成功。その後、飛行機製造会社が設立され、アメリカ陸軍省がライト機を購入した。なお、ライト兄弟は牧師の子である。
- (2) 1901 年イタリアのマルコーニがイギリス・カナダ間の大西洋横断無線通信に成功。1907 年には音声の無線伝送が成功し、1920 年にはアメリカで商業用ラジオ放送が始まった。
- (3) 1943 年アメリカでマンハッタン計画に基づき、原子爆弾研究所がロスアラモスに建設され、1945 年 7 月ニューメキシコ州で、初の原子爆弾の実験に成功した。
- (4) ティリッヒは "second nature" と表現している。

- (5) ティリッヒが述べている「現在」とは執筆時の 1945 年の頃を指すが、その指摘内容は 2005 年の現在においても適用できるものであると筆者は考えている。
- (6) ここで言う自動的調和は、ライプニッツやデカルトとその学派が展開した種々の予定調和論を指している。
- (7) 「ティリッヒの技術論」については、筆者の拙論（ティリッヒ研究 第 1 号）を参考いただきたい。
- (8) 典型例が原子爆弾である。科学的研究の目的とは異なった技術的可能性(手段)が生まれ、目的が手段に振り回される形で、原子爆弾が開発された。

（まえかわ・よしのり 大阪産業大学工学部教授）

